

昔から性欲が異常だなんて思ってた。

小学生の頃からオナニーとは知らず床オナしてたし、
そういう知識がついた頃には毎日のように寝る前にオナ
ニーしてた。

就職して一人暮らしなんて始めちゃったらおもちゃも
買い漁って毎日何度もオナニーしまくった。

だけど、それは仕事が忙しくなって残業続きになると
止まってしまった。

オナニーする体力もなく寝てしまうから。

仕事のストレスでオナニーしたい、でも仕事のせいで
オナニーできない。

そんなんだからムラついたまま仕事する日々。

「おっす、夢子ちゃん」

そう後ろから声がして、背中をつ、となぞられた。

上から下へ、途中、ブラジャーのフックに引っかかりつつ滑っていった。

「あ、広瀬(ひろせ)さん」

「今日も残業？」

広瀬さんは少し上の先輩だ。

横に並んだ広瀬さんは伸ばしてきた手でやわやわと私の胸を触りながら話を続けている。

「はい、広瀬さんもですよね？」

「そうだよー、いつまで続くんだろうねこれ。早く人の補充してくんないかなあ」

「ほんとですよねえ」

今度は前から広瀬さんと同期の久保(くぼ)さんが歩いてきた。

その手はすれ違う直前に私の胸の位置に固定される。

「おっすー」

久保さんはそう軽い挨拶しながらすれ違いざまに私の胸を手のひらで包んだ。

たったそれだけして、私たちとは反対のほうへ歩いて

いった。

——私はいつの間にか、先輩たちに「セクハラをしてもいい後輩」と認知されていた。

最初は入社して数ヶ月、たまたま広瀬さんの肘が私の胸に当たったときに始まった。

当たった瞬間に広瀬さんは慌てて「ごめん！」と体を離れたのだけれど、私は「全然気にしてません」と返したのだ。

全然気にしてないのは本当。

むしろ常にムラついているような私は不意に触れた男性の体に心臓を甘く跳ねさせたくらいなのだから。

広瀬さんはその返答に驚いた顔をして、それからおどけてまた私の胸を肘でつついた。

私も逃げなかった。それどころか「あはは、やわらかいですよねおっぱいって」とか笑ってノかった。

その日から少しずつ広瀬さんはふざけて私に触ってくるようになった。

肩を抱いてきたりお尻も触ってきたりするようになったし、胸も、肘で感触を確かめていたのが手のひらや指先になった。

始めは広瀬さんしかしてこなかったそれは、広瀬さんが同僚なりに話して噂になってしまったんだろう、久保さんも、その他の男性社員も今では私に触ってくるようになった。

私はそれが嫌じゃなかった。

むしろ、いっそのこともっとエスカレートすればいいのと思っていた。

そしてそのチャンスは、忙しすぎて会社全体が殺伐とし始めた頃にやってきた。

「あれ、夢子ちゃんもなんか取り来たの？」

ある日の残業の時間。

私が資料室で久しぶりに取引する会社の過去の見積書を探していると広瀬さんが入ってきた。

「はい…、見積書なんですけどもうかなり前のものなので電子化されていないみたいで。広瀬さんは？」

「俺はメーカーの旧カタログに載ってる仕様情報が知りたくてさ」

それだけ話して、お互いに目当てのものを探し始める。
資料室なんて普段はあまり人が来ない。

今後使わなさそうだけど念のために取っておかないといけないものをみんなが乱雑に突っ込むような場所だから目当てのものを探すだけでも面倒だ。

スチールラックの「カン、カン」という高い音を鳴らしながら私たちは分厚いファイルや紙の束に手をかけていく。

しばらくそうしていると、背後に気配がした。

「夢子ちゃんとはかなり仲良くなってきたと思うけど、なかなか密室で二人きりになることってないよね」

抱きしめるように体に巻きつく腕。

広瀬さんが私を背後から抱きしめてきた。

私の頭に顎を置いて私を閉じ込めると広瀬さんの手は私の胸を包む。

大きな手のひらが指を均等に開いて、ときどきその脂肪を揺らすように力がこもった。

「夢子ちゃんのおっぱい本当に気持ちいいな～、この会社の唯一の癒しだよ」

「そうなんですか？癒しになれてるならよかったです」

それから指が動いて、中指の指先がその曲線の頂点で止まった。

顔も体も少しずつ熱くなっていく。

いつもと広瀬さんの手つきが違うから。

「いつも癒してくれるこのおっぱいにお礼がしたいと思ってたんだよね」

くに…♡

「…っ」

指先が少しだけ曲げられてそこへ沈んで、また戻った。

ただそれだけ、一瞬押されたただけなのに…♡

鈍いとも言えないような微かな刺激に私のシャツとブラジャーの中で乳首はむくむくと反応する♡

くに♡

くに♡

指先は両乳首を同時に押した♡

くに♡

くに♡

くに♡

「ひ、ひろせ、さ、」

「なに？」

くに♡くに♡くに♡

「っあ♡」

波打つような刺激に思わず体を曲げた♡

閉じ込められた体は指からは逃げられない♡

乳首、痛い♡♡

完全に勃ってる♡♡♡ブラ押し上げてる♡♡♡

「直接触りたいな」

広瀬さんは腕を解くとパンツにインしていた私のシャツを引っ張り出してしまった♡

すぐさまその中に入ってくる手は素肌を滑りブラのホックを狙っている♡♡

そのくすぐったさにいたたまれなくなっていると狙い通りすぐにホックを外された♡

シャツの中、ブラをたくし上げられその手のひらが今

度は直接胸を包んでいる♡

「これが夢子ちゃんの生おっぱいかあ♡」

「何言ってるんですか、…んア”っ♡♡」

きゅむ♡♡

乳首には触れないで、人差し指と中指が乳輪を挟んだ♡

びく、体が揺れて私は思わず目の前のスチールラックを掴む♡

挟まれた乳輪の中心の、まだ触れられていない乳首がじんじんする♡♡

体を屈めラックに上半身を預けるとその乳首が下に引っ張られて血液が集中してくような感覚がした♡♡

きゅ♡♡きゅ、きゅむ♡

「ん♡は、あっ♡」

きゅ♡きゅ♡きゅう♡♡

「あ、あッ♡♡あ♡」

きゅう……♡♡♡きゅ、きゅ、きゅ♡

「うんん、ッ！♡♡♡」

ただ乳輪を挟まれてるだけ♡

なのに体が反応してしまう♡♡

「触っちゃうよ、夢子ちゃんの乳首♡」

「……♡♡♡」

片方の人差し指が胸から浮いたかと思えば、
すり♡

乳首の頂点を触れるだけの優しさで撫でた♡♡

「っう♡♡」

それだけで体は過剰にびくっと震える♡♡

「ああ、もう勃ってるね♡」

「あ、っ♡うあ♡ア♡♡だめ、です、そんな♡♡」

「かわいいなあ、こんなに優しくよしよし♡してるだけ
なのに気持ちいいんだ♡」

「ん♡あ、♡♡は♡あ♡♡♡」

乳首の先のほんの小さな面積からじわじわと気持ちいいのが広がっていく♡♡

「今度は下から撫でてみよっか♡夢子ちゃんの勃起乳首
の下から、上へ♡♡ほら、いいこいいこ♡♡」

「…ッ♡♡んあッ、あ♡♡ああっ♡♡♡」

「はは、背中ビクビクしてる♡♡今度はくるくる♡爪で乳首の根元、くるくる……♡♡♡」

「あ……ッ、う、うう♡♡♡」

片方の胸の乳輪を、

きゅむ♡♡きゅ♡きゅ♡

と挟みながら♡♡

もう片方の乳首を、

くるくる♡♡すり、すり、すり♡♡

小さく撫で回す♡♡

その胸だけに与えられる刺激で私の体が前へ倒れていくと広瀬さんはそこへ覆い被さるように体重をかけて私を抱え込んだ♡♡

体がビクリと反応すれば背中では広瀬さんの胸に押し付けてしまう♡♡

「もうちょっと強くしょうか♡♡」

「は、へ……」

今度は指の腹が乳首の幹に触れた♡♡

その指は、

こりっ♡♡

勃起しきった乳首を上へ倒し、

こりっ♡♡こりっ♡♡

右へ倒し、左へ倒し、

こりっ♡♡こりっ♡♡こりっ♡♡こりっ♡♡こりっ♡

♡

下へ倒すと、指先で引っ掛けるように乳首を倒して回る♡♡♡♡

「ツッ、お♡♡……っ♡♡♡お、あっ、ア♡♡」

「夢子ちゃんいつも乳首でオナニーしてるの？乳首すっごく反応いいね、これ好きなんだ♡」

「……♡♡ち、ちが♡♡っ、ん♡お♡♡♡おっ♡♡ッ♡♡」

「勃起乳首ころころ♡♡オナニーで自分で触るのと全然違うでしょ♡♡」

「♡♡ふお、お♡♡♡ちくび♡♡♡きもちいい♡♡」

勝手に上向いてしまう顎♡♡伸ばしてしまう首♡♡

その下で、白いシャツの中、片方の乳首を縦横無尽に広瀬さんの指で転がされる♡♡♡♡

こり♡♡こり、こり♡♡

こりっ♡♡こりっ♡♡くるくるくるくる♡♡♡

「ッお♡♡あ♡♡♡あ、あああ♡♡ちくび♡♡いい♡♡
♡っほ♡♡お♡♡♡お、おん♡♡♡」
「こっちもしてあげる♡♡」

挟まれていた乳輪が解放されてそちらにも指がかけら
れた♡♡
すると今度は♡♡

こりこりこりこりこりこりこりこりこりこりっ♡♡
♡♡

「んおおッ！♡♡♡♡♡」
さっきまでしてくれてたのとは違う、慣らしもしてく
れない♡♡

直接触れてすぐ指先で転がされてしまった♡♡♡
それも力もスピードも増して♡♡

こりこりこりこりこりこりこりこりこりこりっ♡♡
♡♡

「お♡♡♡♡♡ん♡♡ん” ッ♡♡♡お、お、おッ” ♡
♡♡♡♡や、やば、これ♡♡りょうほ、やばい、やばい
です、……ッ” お♡♡♡……ッおお♡♡♡♡♡」

こりこりこりこりこりこりこりこりこりこりっ♡♡
♡♡

「お”、……………ッ、ほ、お”、お……お” ♡♡♡♡

♡」

後ろから抱えられ広瀬さんに顔を見られていないのをいいことに、私は顔を崩して乳首への刺激に集中しきっていた♡♡

下半身の欲を誤魔化すように太もも同士を擦り付け、内股になり、腰を揺らす♡♡♡♡

こりこりこりこりこりこりこりこりこりこりこりっ♡♡♡♡

「ん、ん~~~~~ッ♡♡♡♡♡」

こりこりこりこりこりこりこりこりこりこりこりっ♡♡♡♡

「お、ほ♡♡♡♡♡お♡♡♡♡オッ♡♡♡♡おっ♡♡♡♡おっ♡♡♡♡♡」

夢中になってしまう♡♡♡

ここが会社だということも、残業中だということも頭から抜けていってしまう♡♡

「……夢子ちゃん、こっち向いてごらん♡♡♡」

ふと温かい体が離れた♡

私はじんじんと疼く乳首に呻きながらもラックに背を

もたれさせて広瀬さんと向きあう♡♡

「夢子ちゃんいい顔してる♡♡すごいスケベ顔♡♡♡」

「…だ、だって、広瀬さんが♡♡♡♡」

「腕後ろで組んで胸突き出してみても♡♡♡♡この勃起乳首もっと可愛がってあげるよ♡♡」

促された通りに腕を腰の後ろに回した♡♡

その腕同士を掴むと勝手に胸が反る♡♡広瀬さんに向かって胸を突き出してしまう♡♡♡♡

「いいね、これでもっと弄りやすくなった♡♡♡♡」

「ふっう♡♡♡♡」

広瀬さん私のシャツをたくし上げうっとりと私の乳首を見つめながら、感触を確かめるように大きな手で胸を上から下へ撫でた♡♡♡

勃起乳首が引っかかってその感触にまた呻く♡♡♡♡♡

その手が離れると今度は両人差し指だけが両乳首を狙っている♡♡

「ふ、♡♡ふ～……♡♡♡♡」

「構ってほしくて大きくなってる乳首、カリカリしようね♡♡♡」

「……、♡♡♡ふ、う♡♡♡♡」

差し出した胸の先、つんと勃起した乳首にその指先がかかった♡♡

それから、

かりかりかりかりかりかりかりっ！♡♡♡♡♡
その指は細かく上下した♡♡♡乳首を引っ掛けながら♡♡♡♡

「~~~~~ッッッ！！♡♡♡♡♡」

「こらこら、逃げないで♡♡♡」

私とその衝撃に体を振っても指は乳首を追いかけてくる♡♡

かりかりかりかりかりかりかりっ！♡♡♡♡♡
逃げたいわけじゃない、乳首に電流が走ったみたいに体が弾かれて勝手に動いてしまうのに♡♡

かりかりかりかりかりかりかりっ！♡♡♡♡♡
勃起しきった乳首をさらに勃起させるようにしつこく刺激し続ける♡♡

かりかりかりかりかりかりかりっ！♡♡♡♡♡

「ツッ、おおおっ♡♡♡♡んおッ！♡♡お” ツッ、おおッ！♡♡♡♡♡ひろせさん、これ、待っ♡♡♡♡♡つよい、からあ”っ！♡♡♡♡♡」

「乳首ビリビリしちゃうね♡♡でもこれが気持ちいいでしょ♡♡♡♡」

「お” ツッほおおお♡♡♡♡♡も、らめ♡♡おかしくなる…っ！♡♡♡」

私は気付いていた♡♡♡♡

もじもじと蠢かせてしまう足の間、下着の中がぐずぐずに濡れているのを♡♡

乳首だけをどれだけ気持ちよくされたってここを触ってもらえないとイケない♡♡

昂るだけ昂らされたこれは、もうイかないと終われないのだ♡♡♡♡♡

「胸突き出して乳首カリカリされて体くねらせてる夢子ちゃんエロすぎ♡♡♡♡」

「〜〜〜っ♡♡♡ツッおほ♡♡お♡♡♡♡お、おねがい♡もう、……っ♡♡♡♡♡♡♡」

……イきたくてイきたくて、もう素直におねだりするしかないと思えそうな頭で決意したときだった♡♡♡♡

資料室のドアが開いた♡♡♡♡

「……、広瀬と、夢子ちゃん……？」

照明がついていてもなんだか薄暗い資料室に廊下の光が差し込んだ♡♡

そこに立っているのは久保さんだった♡♡♡♡

久保さんは私たちを見て一歩進んでくると後ろ手にドアを閉める♡♡

「あーあ、久保にも見つかったね」

「なんか声がすると思ったら…いいことしてるじゃん。これ俺も混ざっていいやつ？」

二人の言葉に心臓が鳴った♡♡♡♡

止められるどころか、人が増えてしまった……♡♡♡♡

しかも広瀬さんと同じようにしょっちゅう私にセクハラしてくる久保さんだ♡♡♡♡♡

私は大きく息を飲んだ♡♡

「夢子ちゃんいいよね♡♡久保にもいっぱい乳首可愛がってもらお♡♡♡♡」

「夢子ちゃんの乳首すっげー勃ってるじゃん、おいしそ〜♡♡」

後ろで腕を組んで胸を突き出したままの私は、久保さんが近寄ってくるとさらに熱く息を吐く♡♡

さんざん指先で弾かれた乳首は脈打つのが分かるほどじんじんと敏感になっていた♡♡♡

「食べちゃお♡♡♡」

久保さんはそう言って私の勃起乳首に顔を近付けると、

ぢゅっ♡♡♡♡♡♡

温かく湿った唇でその勃起を包んだ♡♡♡♡♡

ぞくぞく…っ♡♡♡♡♡♡

やわらかいものに乳首が包まれて震え上がる♡♡♡♡



「ふッ♡♡う、うう♡♡♡♡♡」

「久保の口気持ちいい？俺もしてあげるよ♡♡♡」

スチールラックに背中を押し付け悶えていると反対の乳首も広瀬さんに口に含まれてしまった♡♡♡♡♡

ぢゅ、ちゅ♡♡♡

ぢゅ♡♡

ちゅ、ちゅ♡♡ちゅむ♡♡

ぢゅう、ぢゅ、ぢゅ、ちゅう…♡♡♡♡

「お♡♡♡ほ♡♡お♡♡♡♡お♡♡♡♡♡お♡♡♡っ♡♡♡♡」

二人の唇がバラバラの動きで乳首を食んでいる♡♡♡♡

ぢゅう…♡♡ちゅ、ちゅむ♡♡

ちゅっ♡♡ちゅっちゅっちゅっ♡♡

ちゅ〜〜……♡♡♡♡♡ちゅ〜〜……♡♡♡♡♡

「うあ♡♡♡あ————…っ♡♡♡♡♡りょうほういっしょ、すごい♡♡♡♡きもちいい…♡♡♡♡♡いいよお♡♡♡♡♡」

食むだけだったそれは、

れ♡♡

れる♡♡

れるお♡♡れるっ♡♡れるっ♡♡

れるれるれるれるれるれる……っ♡♡♡♡♡

「んお♡♡♡ほ♡♡♡お” ツ♡♡♡♡んお、お、おっ♡♡♡」

舌で擦られ、撫でられ、くすぐられ♡♡♡

べろっ♡べろっ♡

べる、べる、べる、べる、べる♡♡♡♡♡

べろべろべろべろべろっ♡♡♡♡

……べるるるるるるッ♡♡♡♡♡べるるるるるるッ♡♡♡♡♡

「んううッ♡♡♡♡♡ッほ、お”、オ”♡♡♡♡♡
♡おおおおおおッ♡♡♡♡♡」

二人はくねる私の体をラックに押し付けながら、今度は弾き、転がし、叩く♡♡♡♡

別々の刺激で責められる突起♡♡♡♡♡

気持ちよくて体温が上がって頭がぼーっとして……♡♡♡

でも、イケない、これだけでは♡♡♡♡

ねだるように動く足を止められない♡♡♡

早くこの中を触ってほしい♡♡♡

べるるるッ♡♡♡♡べろっ、べろお♡♡べるるるる
るッ♡♡♡♡♡

れるれるれるれるれる……っぢゅううう♡
♡♡♡♡

ぢゅるっ、ぢゅるるるッ♡♡♡♡♡

ぢゅろろろ♡♡♡♡♡ぢゅぶ、ぢゅぽっ、ぢゅぽっ
ぢゅぽっ♡♡♡♡♡

二人に乳首を差し出し、顎を上げて声を漏らしながら
悶え続けていると♡♡♡♡♡

「腰ふりふりして……、もう我慢できないんでしょ♡♡
♡」

パンツのボタンを外しファスナーを下ろしてくれたのは
広瀬さんだった♡♡

すとな、と足首まで落ちていってそのまま足首をま
められ、広瀬さんは今度は下着に手をかける♡♡

そして笑った♡♡♡♡

「うそ、こんなにぐちょぐちょになってんの？♡♡夢子ちゃん濡れすぎ♡♡♡♡そんなにおまんこ寂しかった？♡♡♡」

「…ほんとだ、乳首だけじゃなくしておまんこも触ってほしかったんだ♡♡♡」

下着もそのまま落とされて下半身が空気に晒される♡♡

濡れたそこから内腿を伝って愛液が垂れていった♡♡♡♡

「これだけ濡れてれば指入れちゃっても大丈夫かな♡♡♡」

広瀬さんが足の間に指を差し入れ私は促されるように足を少しだけ開いた♡♡

足首をまとめられているせいでガニ股になってしまう、それを恥じる理性くらいは残っていたから、軽く開いただけだったのに♡♡♡♡

「……あはは♡♡簡単に飲み込んでくじゃん♡♡♡♡」

「…っっ♡♡♡♡♡」

つぶ…♡♡♡♡♡

指を挿れられ、

くちっ♡♡

ぐち、ぐちゅ♡♡

全て埋められ、軽く上下されて♡♡

「濡れすぎてて滑りいいわ♡♡♡♡」

くちゅっ♡♡

くちゅくちゅっ♡♡♡♡

くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅっ♡

♡♡♡

奥まで押し込み入り口まで戻って、それを早いペースで繰り返されると♡♡♡♡

「……ッ♡♡ッッふお、お♡♡♡お♡♡ン” お、おッ♡♡♡」

「夢子ちゃん腰落ちてるぞ～♡♡あ、もしかしてわざと？この奥くちゅくちゅしてほしい？♡♡♡♡奥好きなんだ？♡♡♡」

「オ” ……っっ！！♡♡♡♡♡♡っお♡♡♡んおおおお
ッ♡♡♡♡♡」

「こら～、ちゃんと乳首も意識しろ～？♡♡♡♡♡」

「ひ…………ッ” い♡♡♡♡♡」

腰、勝手に動く……♡♡♡♡♡

べるるるるッ♡♡♡♡♡

べるっ♡♡べろっ、べろ♡♡

ぢゅッ♡♡ぢゅッ♡♡ぢゅッ♡♡ぢゅうう～～～……

♡♡♡♡♡

ぢゅっぽ♡♡♡ぢゅっぽ♡♡♡ぢゅっぽ♡♡♡ぢゅっ
ぽ♡♡♡

両乳首、二人の口と舌でわけわかんないくらい吸われ
て舐められて♡♡

くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ
っ♡♡♡♡♡

くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ
っ♡♡♡♡♡

二本の指を奥までまっすぐ埋められて指の腹で膣壁擦
りながら上下に動かされて♡♡♡

「お” ッ♡♡お” ッ♡♡♡お” ッ♡♡♡や、ばいっ、と
まんない♡♡♡♡これっ♡♡よすぎる♡♡♡♡っほ♡♡

お” おっ♡♡♡オ” ツ” ♡♡♡♡♡」

「ガニ股腰振り始まっちゃった♡♡♡♡♡」

「イきたいっ♡♡♡イきたいっ♡♡♡イきたいっ♡♡♡
♡ちくびもおまんこもされてイ`きたいい`ッ!♡♡♡
♡♡」

自ら後ろで腕を拘束して二人に胸を突き出し、おまんこピストンしてくれる指に対してガニ股で無様に腰を上下させる♡♡♡♡

一度味わってしまったその甘い疼くような感覚に腰は止まらなかった♡♡

ちゅぽっ♡♡ちゅっぽ♡♡♡ちゅぽッちゅぽッ♡♡♡
ちゅぽッちゅぽッ♡♡♡

べるるるるるるッ♡♡♡べるるるるるるッ♡♡♡

くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ
っ♡♡♡♡♡

くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ
っ♡♡♡♡♡

「……ん” く♡♡う” うッ♡♡♡♡~~~~~…………ッ
ッ” ♡♡♡♡♡」

ちゅ〜〜〜〜……ツツ♡♡♡♡♡あむツ、ちゅぷ、ちゅぐ、ちゅぐっ♡♡♡♡♡

べるっ♡♡べるるるるるッ♡♡♡べるるるるるるるッ

♡♡♡♡♡

くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ

っ♡♡♡♡♡

くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ

っ♡♡♡♡♡

「……っ、お♡♡♡お”♡♡♡♡ほ♡♡♡♡♡♡……い、
く♡♡♡♡」

おまんこを往復する指から頭のとっぺんまで、両乳首
で増幅した快感が何度も何度も突き抜けていく♡♡

私は無我夢中で腰を振った♡♡♡♡

「イ”、イっちゃううう……！！♡♡♡♡♡……ほ、
お”っ、オ”、オ”、んお、……♡♡♡♡♡いくっ♡
♡いくっ♡♡んおおおおおおおッ！！♡♡♡♡♡♡
♡♡♡」

ガクンッ♡♡♡♡♡

ガクンッ♡♡♡ガクンッ♡♡♡

私は半ば白目を剥きながら突き出した腰を何度も跳ね

させた♡♡

その私をあやすように中の指は優しく膣壁を撫でてい
る♡♡♡♡

「すごいイきっぷり♡♡♡♡俺もうちんぽバカ勃ってん
だけど♡♡♡♡」

「さすがに挿れていいよね？♡♡ここまで来て拒否とか
ないよね？♡♡♡」

二人が両側から私の体に擦り寄ってくる♡♡♡♡♡
体はまだピクピクと絶頂の余韻に反応したままだ♡♡

もたれたラックからずるりと背中が滑りかけると広瀬
さんに体を掴まれた♡♡

その手は私を横向かせると後ろから腰を掴む♡♡♡

それからお尻に食い込ませるように押し付けられた♡
硬いものを…♡♡♡

「夢子ちゃんももう欲しいでしょ、指だけじゃおまんこ
さびしいもんね♡♡♡♡」

背後からそう広瀬さんの声が出て、そして右手だけで

ラックに掴まり体勢を保っている私の胸元へは久保さんが屈んだ♡♡

久保さんは私の上半身を支えながらすっきり勃った乳首をまた、ちゅむ♡♡ちゅむ♡♡と音を立てて吸っている♡♡♡♡

それが絶頂直後の体にはちょうどいい刺激で♡♡♡♡
私はまた無意識に胸を突き出していた♡♡♡♡

後ろでベルトを外す音♡♡♡

今度お尻に押し付けられたのは温かい生肌♡♡

かと思えば、それはお尻の割れ目を伝って下がり、濡れた入り口を先で開かせてきた♡♡♡♡

おちんぼ♡♡♡♡

入ってくる……♡♡♡♡

ぬ♡♡♡

ちゅ♡♡

充分すぎるほど濡れたそこに広瀬さんのちんぽが埋ま
っていくと、

——また、ドアが開いた。

「……え、お前たち何やってるんだ？」

「なんか声が聞こえると思ったら……」

「夢子ちゃんと……、広瀬と、久保？」

課長と、主任と、それから先輩……、三人いるのが見える。

ぱんっ！！♡♡♡♡♡

「お” ほっ♡♡♡♡♡」

一瞬だけその姿を捉えたけれど、そこへ広瀬さんが腰をぶつけて視界が揺れた♡♡

パンッ！♡♡パンッ！♡♡パンッ！♡♡

「んっ♡♡お♡♡♡ッお”♡♡♡」

「え、え？夢子ちゃん！？」

「いいから早く閉めてください」

パンッ！♡♡パンッ！♡♡パンッ！♡♡パンッ！♡♡
パンッ！♡♡

「オほっ♡♡♡んおおっ♡♡ッッあ”♡♡♡♡はッ、ア

“♡♡♡♡♡”

「さすがに大丈夫なのか…、これ」

「見たら分かるでしょ」

パンッ！♡♡パンッ！♡♡パンッ！♡♡パンッ！♡♡
パンッ！♡♡パンッ！♡♡

「あああッ♡♡♡♡きもちいいっ、おちんぽきもち
いいよお”！♡♡♡♡♡”

「……………」

「ね」

パンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンッ
ッ！！♡♡♡♡♡♡♡♡♡

加わった三人に見せつけるように力任せに腰を振りた
くられる♡♡♡♡♡

おまんこの奥までちんぽを押し込まれて小刻みに突か
れて揺らされて♡♡♡♡

上半身はしっかりとホールドされて乳首吸われて……
♡♡♡♡

パンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンッ
ッ！！♡♡♡♡♡♡♡♡♡

パンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンッ
ッ！！♡♡♡♡♡♡♡♡♡

「あッ、あ〜〜〜〜〜ッッッ♡♡♡♡♡だめ、かも♡♡だめっっ、また、……ッ”ッ”♡♡♡♡ん”、お”、お、おっ♡♡♡♡♡いくっ♡♡♡♡♡ちんぽでイクッ、…〜〜〜〜ッッッ♡♡♡♡♡イクッ、ッッおっ、ほおおおおおッッ！！♡♡♡♡♡♡♡♡」

バツンッッ！！♡♡♡♡♡

久保さんにしがみついて顎を上げる♡♡♡♡

絶頂した瞬間広瀬さんは更にちんぽを奥にぶつけ射精しているようだった♡♡♡♡♡♡

満足したのかそれがゆっくりと抜けていくと、今度私の体を受け取ったのは久保さんだ♡♡

久保さんは性急に勃起したちんぽを出すと背後から私を羽交い締めにした♡♡

「夢子ちゃん、今度は課長たちに乳首可愛がってもらおうか？♡♡」

ぐちゅ、ちゅ♡♡♡♡

そう後ろから聞こえてくると同時にちんぽは進んで

きた♡♡

広瀬さんのちんぽで広げられて、イかされて、ゆるんでしまったそこにまたちんぽが埋められる♡♡♡♡

体の芯からチリチリ、快感に火がついて私は身を振った♡♡♡♡

とちゅっ♡♡♡

とちゅっ♡♡とちゅっ♡♡とちゅっ♡♡とちゅっ♡♡

「ン あっ♡♡あ、は♡♡♡ア” ツ♡♡うあ♡♡♡」

「ほら夢子ちゃん、おねだりして♡♡乳首さびしいだろ♡♡♡」

■続きは製品版にて♡